

【正義と悪の境界線】

アホ伝説 「悪と華」 2

【メタ・恋愛・サスペンス】

植崎優士 「虚構の人、虚無の器」 20

【交錯する想い、青春の舞台】

空つぽの夜 「未完成戯曲」 39

あとがき 53

あく はな

悪と華

2014年 東京―

詐欺をしよう。

そう思い立った俺は、都内有数の総合病院に来ていた。大学を出ておおよそ半年。定職にも就かず日雇いのバイトなんかをして口に糊する生活。死にはしないが、希望もない。ただ生きることに従事するような毎日。そんな生活が俺の神経を麻痺させたのか、明日という言葉に意味を感じなくなつてから久しかった。

バイト代の殆どは家賃や生活費に浴け、わずかに手元に残った金も、ギャンブルにつき込んでしまう悪循環。そうこうしている内に借金まで出来てしまい、気が付けば首が回らなくなつていた。

両親はすでに他界し、親戚とも絶縁状態の俺には、頼れるツテなんて無かった。とにかく自分の力で何とかせにゃならん。けど俺には金を作ろうにも元手も何もない。

金を持つていない。ただそれだけの理由で、俺はこの大都会で溺れかけていた。

変わりたい。俺はいつからかこの沈殿しきつた人生を絶ち切りたいと思つていた。その願望は日を追うことに強くなつていき、同時にモンモンとした気分が胸を覆つていった。

浮かび上がりたい……なんとしても……!

迷つた拳句に俺が辿り着いたのが詐欺だった。息子のふりをして老人

アホ伝説

でんせつ

に金を振り込ませるあれだ。

ターゲットはもう決まつている。東京郊外で暮らす遠山ヨネさん七五歳。まだ俺が学生だった頃にバイトで行つた老人ホームで知り合つた人だ。

ヨネさんの家がたまたま俺のアパートの近くだということもあつて、それからもお邪魔するようになっていた。といつても俺はただ話し相手になるだけだ。寂しさを紛らわせるためか、ヨネさんは俺に何でも話した夫に先立たれて一人で暮らしていること。都心で暮らす息子夫婦とはなかなか連絡がとれないこと。そして貯金を二千万程蓄えているということ。

そのことを聞いた瞬間、俺の頭の中で悪魔が囁いた気がした。『いけ』と。『やれ』と。

そして今日。考えめぐねた俺が行きついた場所がこの大病院。そのロビ―脇にある公衆電話。携帯を使わずに済むうえ、金の話をしていても不自然がられることもない。絶好のポイントだと、我ながら自負していた。

受話器を取り小銭を入れ、ゆつくりとボタンを押す。

よく見ると伸ばした指が震えていた。心臓がバクバクと暴れたし、視界がグニヤリと歪んでいく。汗が滝のように頬を伝い、呼吸さえままならなくなつていく。

怖い。逃げたい。

俺は頭をブンブン振つて迷いを振り払つた。

迷うな! 今日ここで、俺は俺の人生変えるんだ……!

そうだ……俺は変わりたい……!

未来に夢見て生きたい……!

勝ちたい……！

何も「千万全部奪う」ことはない。その半分……いや、五百万……百万……五十万……！

ガシッ！

最後のボタンに指を伸ばそうとしたとき、唐突に俺の右手は動かなくなった。脇から伸びてきた誰かの腕が俺の右手を掴んでいた。

ゆっくりと右を向く。そこにいたのは見知らぬ男だった。高級そうな臙脂色のスーツを身にまとっていて、背は俺よりも若干高い。がたいはいいが、強面の顔にはしわが目立ち、五十は超えてる印象だった。

嘩然とする俺の心を意に介さず、柔和な笑みをたたえたまま男は言った。

「やめておけそんなこと」

「え？」

「お前がやるうとしてしていることは自らの未来を閉じていく愚行。勝ちへの布石なんかじゃねえ。詐欺なんてやめておけ」

俺は男の言う意味がすぐにはわからなかった。そして理解した途端に全身から汗が吹き出し、シャツがべつとりと肌に張り付くのがわかった。俺は男の腕を思い切り振り払い、怯えるように後ろに跳んだ。

「な、なんだあんたは！ 訳のわからんことをいうな！」

「そうか？ 俺には老人を振り込め詐欺にひっかけようとしているように見えたが？」

「データメ言うな！ それ以上言うらぶつ殺すぞ！」

強気な言葉とは裏腹に、内心ビクついていた。

こいつ……なんで知ってるんだ……？

俺の考えを知ってか知らずか、男は強引に話を進めていく。

「まあ聞け。仮にお前が例の婆さんから百万程首尾よくせしめたとして、それでどうするつもりだ？ 百万はお前みたいなガキの小遣いとしては破格だが、未来を劇的に変えられるような金じゃない。端金もいいと。」

「え？」

我ながら間抜けな声が出た。自ら告白しているようなもの。当然それは目の前の男にも伝わったらしく、シニカルな笑いを浮かべている。

「なんでそんなことまで……」

「わけあってお前のことを調べさせてもらった。立花恭平二十三歳。親兄弟はなく、大学卒業後も定職に就かずフリーター状態。その放蕩さがたつてか、借金が三百万ある。どうだ？」

「……」

「落ちて置いて考え直してしろ。お前にとつて百万なんて右から左に消える金だ。後に残るのは犯罪で汚れた両手だけじゃねえか。その辺の所、お前がどう帳尻合わせてんのか知らねえが、俺から言わせれば自殺行為さ……で、いくらだ？」

「え？」

「いくらいわせるつもりだったのかって聞いてんだよ」

「……五十万」

そう言った瞬間、目の前の男はバカにしたようにケラケラと笑い出した。

「何がおかしい！」

「いや、すまん。てつきりもうちよつとくらい肝のすわった奴かと思つていたんだが、拍子抜けしちまったよ。だったらなおのことやめた方がいい。お前に詐欺なんて無理だ。そもそも向いてねえ」

「う……」

うすうす自分でもそう思っていた。事実、また手が震えている。詐欺をはたらこうとした、その恐怖と余韻がまだ俺の胸を締め付けていた。けど……

「馬鹿にするな！ あんたにとやかく言われる筋合いはない！」

すると男はにやけていた顔を引き締め直し、目つきを鋭く尖らせる。

「なら聞か、どうして五十万なんだ？」

「どういう意味だ」

「お前が狙っている婆さんには、千万程の貯蓄があるんだろ。さすがにそれ全部とは言わねえが、少なくとも三百万はいつといた方が賢明だったんじゃないかねえのか？」

「……さ、三百万も引つばるようない口実思いつかないし、第一ヨネさんの生活にも支障がでるから……」

しどろもしどろになりながら、震える手で胸ポケットから煙草を取り出して、箱から一本押し出して口にくわえた。ライターを取り出そうとポケットをまさぐっていたところで、男に啞えたタバコをさっと奪われてしまった。

「何しやがる」

「院内は禁煙だろ」

「わ、わかってらあー！」

「まあいいさ。話を戻そう。確にお前の言うような理屈もあったかもしれねえが、お前の一番の根つこの部分にあるのは、自分への言い訳じゃねえのか？」

「え？」

「自分で言つて分からねえか？ もし本当に例の婆さんの生活の心配してんなら、そもそも詐欺なんてしなかつたはずだぜ」

「それは……」

「正直になれ。内心お前は婆さんのことなど気にも留めていない。極端な話、死んでも涙一つ流さねえだろ。にも関わらずお前がそんなお題目並べるのは、どこのつまり自分へのごまかし。婆さん破滅させないだけまだまだと、自分に無理矢理言い訳しようとしている。わかるか？ 詐欺を働いてその手を汚しておいてなお、お前は綺麗な人間であろうとしている。立花。そこが向いてねえってことなんだよ」

一瞬言葉に詰まった。

触れられたくない部分を抉られる感覚。今すぐに殴り掛かりたかった。にもかかわらずまるで目の前の男に心臓を握られてもしたかのよう。俺は立ちすくんでいた。

「追い詰められて詐欺なんてする人間がどうなるか知っているか？」

「どうなるってんだ……」

「最初はお前みたいに少額だが、大抵その金はすぐ消える。そうなるらまた詐欺を繰り返す。その内慣れも高じて徐々に金額もつりあがり、しまいには詐欺無じや生きられなくなる。大金持った貧乏人が元の生活に戻れなくなるのと同じ。こんなことやめたいと望みながら、また電話を掛けるのさ。『苦しい。もうやめたい。誰か助けてくれ』って祈りながらな」

「……」

「やがて警察に捕まり、取調室で反省するでも後悔するでもなく、ただただ安堵の表情を浮かべるのさ。『ああ、これでやめられる。やつと解放される』ってな……お前みたいな奴が一番そうなる。非情にもなりきれず、かといつて我慢することも出来ない中途半端な奴が一番な」

「黙れ！」

叫ばずにはいらなかった。そうでもしないと自分を保つていられなかった。

「あんたに俺の何がわかるってんだ！ 見てきたかのようなことを言うな！」

「見て来たのさ俺は。この両の眼で、二十年間も」

「なに？」

ハッターリだ。そうに決まっている。俺の考えを察知したのか、男は不敵に微笑んだ。

「嘘だと思ふなら婆さんに電話してみな。その瞬間お前の運命は確定する。そう遠くない未来、お前は取調室で安堵の顔を浮かべているよ」

男はすつと身を横にひき、公衆電話への道を開けた。受話器がだらしなくぶら下がり、ブーブー鳴っている。

ふざけやがって……何が運命は確定するだ。

俺は電話の前まで進み、ぶら下がった受話器を持ちあげた。あと一回おせはヨネさんにつながる。

そっだ、あと一回。あんな男の妄言に惑わされるな。俺は左手で迷いを消し潰すかのごとく受話器を強く握りしめ、右手をボタンに伸ばした。

俺の勝つ道は、ここにあり！

虚構の人、虚無の器

植崎優士

ピンクの亚克力桶に、水の浮かんだ水面。真つ白な手拭いが冷たい水をたっぷり吸つて、桶の底に沈んでいる。

「調子はどうだい？」

頬を赤らめてベッドに横たわる春子は、僕の声を聴くと腫れぼったい瞼を持ち上げた。僕はその姿を横目に、サイドテーブルへと桶を降ろす。黒ずんだリングの皮と果物ナイフの載った皿、そしてカレンダーがあった。日付が目に入り、春子がいつどうなってもおかしくはない時期である。ことを、嫌でも思い知らされた。

「まあまあ、かな」

薬が効いているのだろう。眠そうな目をした春子は、弱々しく微笑むので精いっぱいなようだった。熱で上気する顔から、段々と力がなくなっていく様子を見ると泣き出してしまいたくなる。込み上げてくる感情を必死に抑えて、僕もできる限り笑った。

「それならよかった。悪くないならね」

春子の額に手を添える。じつとりとした汗の感触。本人の言う通り調子が良いらしく、いつもよりは熱くない。

僕はそのままキスをしなくなった。けれど、マスクをとるわけにはいかなかった。我慢して、桶から手拭いを取り出す。ぎゅうつと絞つて、春子の額に載せる。僕の様子をじつと見ていた春子は、気持ちよさそうに目を閉じた。

「冷たい」

春子は気が抜けたように小さな声で呟いた。僕は春子のきれいな顔を見ようと、真横にしゃがんだ。丸みを帯びた幼い輪郭に、長いまつ毛で大人っぽい瞳。そのギャップがどこか魅力的で、少女のようにあどけない笑みはとても愛らしいことを知っている。

「気持ちいい？」

春子は手拭いが落ちないよう気にしながら、小さくうなずいた。

しばらく見ていると、表情から力が抜けて、口がわずかに開く。僕はたまらなく不安になって、春子の首に手を添えた。僕の手が冷えていたからか、触れた瞬間に春子はビクッと体を震わせる。トクン、トクンと少し早いペースの脈拍と、火照った春子の体温を感じて安心した。それから段々と春子の呼吸が深くなって、いつの間にか眠ってしまったようだ。

そつと、春子の頭を撫でる。

汗に濡れた髪が、手のひらにくっついてくる。

春子の体温を吸った手ぬぐいは、すでにぬるくなっていた。

「よう」

資料の束や機材が、雑然と押し込められた事務所。山と積まれた作業道具の中で、ぼつかりと空いたスペースにいた石川は新聞に顔を隠したまま挨拶を投げてきた。足をデスクへ投げ出すようにして座っている。これでも事務所の社長だ。

「お疲れ様です」

こちらを見ないまま、石川は熱心に新聞を読んでいた。ちらりと目をや

れば、一面はWHOに関する記事だった。

「コーヒーでいいですか」

リュックサックをソファに放り投げて、部屋の奥にあるシンクへ向かう。

「いや、茶にしてくれ」

ほう、と珍しく思った。朝はコーヒーを飲むのが、石川のルーチンだったはずだ。

「客に会うんだ」

こちらの心を読んだかのようなタイミングで、石川は面倒くさそうに言った。

「コーヒーは口臭が気になる」

まじめな男だ。汚らしい事務所で大儀そうに事務仕事をしていることの多い男であるけれど、来客の対応など外面はいい。現に、今もきつちりアイロン掛けされたシャツに、安物だが清潔感のあるグレーのスーツを颯爽と着こなしている。まあ仕事柄、こちらがいくら下手に出ても客との揉め事は避けられないのだけれど。できるだけ穏便に済ませるための処世術なのだろう。

ケトルに水を入れて、油のこびりついたガスコンロに載せる。接触が悪いのか、つまみを何度か捻ってやっと着火した。湯が沸くまでの間に、さつさと着替えを済ませる。

清掃員風の、上下グリーンの作業服。そのボタンを留めていると。

「奥さんは元気が」

石川は唐突に聞いてきた。

えっ、と思わず振り返る。石川は変わらず紙面の先に顔を隠している、

表情が読めなかった。

「……ええ」

戸惑いつつ、小声で答えた。

「そうか」

それきり、石川は何も聞いてこなかった。電気ストーブが発するジューという音以外、室内は静まりかえっていた。

春子を一目ぼれしたのがきっかけだった。

重要管理医療センターの、受付に座っていたのが彼女だった。

白く輝くようなナース服に包まれ、にこやかに案内してくれる春子。一度に交わす言葉は多くなかったけれど、仕事で頻繁に訪れる僕は合間を見ては彼女と話すための時間を作った。

「まだ異動してきたばかりなの」

最初に彼女自身の話を聞いたとき、このように言っていたはずだ。そのときに年齢を聞くと、僕と同年だったことに驚いた覚えがある。片や政府の重要機関に務める優秀なナース、一方の僕は下請けの小さな特殊清掃業者である。もちろん、僕も政府にとつて大切な仕事を請けているけれど、学歴も安定性も天地の差だった。僕がする仕事は学歴や知識など必要なかった。体力さえあれば、誰だった構わないのだ。しよせんは、末端の作業員に過ぎなかった。

石川はよくしてくれていた。事務所の社長である彼は、あまり要領のよくない僕にも、他の誰とも変わらない態度で接してくれた。苦手なことに

対しても呆れずに、いつかできればいいと長い目で見てくれたのだ。だから今でも何とか辞めずに、石川の事務所で中堅社員として働いている。決して楽な仕事ではないけれど、居心地の悪い場所ではなかった。

職場でできる話は簡単なものだった。当然、春子は仕事中で、僕だって帰社しなければいけなかった。あまり長く話している暇はなかったのだ。

「昔、テレビで国際医療のボランティアを見かけてね」

そのとき、春子は自分がナースを目指したわけを話してくれた。

「誰かの命に関わる仕事を知ったの。別にそういうボランティアでやりたいってわけじゃなくて、そのとき映っていたナースに憧れたんだ」

重要な仕事である今の職場にいることも名譽だけれど、彼女は笑いながら、そう締めくくった。

春子と付き合えるとは夢にも思っていなかった。

体力だけが自慢のような僕だったから、有名な大学で看護や医療について学んだ彼女が振り向いてくれるとは思わなかった。変な話だけれど、恋をしていても叶うことを想定していなかった。

奮発して、普段は絶対行かないようなイタリアンの店へ食事に行ったときのことだ。白いカーディガンに覆われるようにして、黒のワンピースドレスが覗く姿の春子を見て——普段の白いナース服とは違う姿を見ることができて、感動したのだった。慣れないジャケットを着こみ食事が一通り済んでから、春子に告白をすると彼女はうれしそうにうなずいてくれた。僕は自分でも驚いて、どうして付き合ってくれるんだと意味の分からないことを聞いてしまった。春子は大きく考える風もなく自然な口調で答えてくれた。

「素直で優しい人だって、すぐにわかったから」

「バカだから、考えることができないんだってよく言われたけれど」

「素直だから、何でも受け入れちゃうんだよ。良いこととか、悪いこととか、はつきりわからないことはとりあえずうなずく。そういうタイプでしょう？ 周りから口車に乗せられて、割に合わない役回りを押し付けられたりしそうでもない」

春子の言うとおりだった。子供のころから、わけもわからないままにいたずらへ加担させられて、気づいたときには主犯にされていたなんてことはよくあった。

「僕といると、イライラするって言われたりもしたよ」

当時はひどく傷ついたが、さすがに大人になってくれば、自分が間の悪い人間だということにも気がついた。だから、今は仕方ないなあと思いつながら笑い話にもできる。どうしたって、そういう人間なのだから憂いても仕方がない。

「心が疲れていたり、忙しい人はそう思うんだろうね。まあ、私も日々考えることは多いし、世の中の嫌なものだつてたくさん見ているから、余裕があるとは言えないけれど、あんな仕事だから、仕方ないね」

春子はグラスを傾けた。赤ワインがぐらりと揺れる。気づけば、春子の頬にも赤みが差していた。もしかして酔っぱらった勢いでオーケーしたんじゃないかと、少し不安になった。

「裏表のないあなたを見て、うらやましく思った。……きつくないものね。だりなんだよ、みんな。うらやましさがひっくり返って、憎らしく思っちゃうんだ」

僕が黙っていると、春子は優しく微笑んでグラスを置いた。

「私は傍にいたいと思った。今の自分では忘れてしまいたいようなことも、あ

あなたの傍に在ることで忘れずにいられると思つたから。あなたは社会で生きるの難しいのかもしれないけれど、平和で穏やかな時間を、あなたの傍でなら感じられると思つたから」

嬉しかった。石川とは違ふけれど、でも似たような安心を覚えた。受け入れられている、赦されている、そういう居心地のよさだった。

「ないものなら、手元に置いておくのが一番いいに決まつてる。だつて元々は、欲しいっていう感情なんでもん」

喋りすぎちゃつた、と言つて春子は天を仰いだ。片手で顔を扇^{あお}いだり、胸元をバタバタと動かしている。先ほどの言葉と相まつて、思わずドキドキしてしまつた。

「ねえ、送つてくれる？」

自然と腕を組んで店を出る。タクシーを拾うため大通りを歩いた。ブランド品の直営ショップが、通りのずつと先まで軒を連ねている。春子は女の子らしく、スタイルの良いマネキンたちが颯爽と服を着こなす姿に、瞳を輝かせていた。「あなたには似合わないね」「これならどうか」「こっちのほうがいいかも」「いかにも春子が好きそう」「この指輪かわいい」「買ってあげるよ」「無理言つちやつて」「頑張つて働くよ」「…無理しないでね」

空車のタクシーが何台も通り過ぎたけれど、僕たちは知らないふりをしてしばらく歩き続けていた。

みかんせいぎよく
未完成戯曲

から
空っぽの夜
 よる

——この世は舞台、ひとはみな役者。

(ウイリアム・シェークスピア)

切れかけの蛍光灯がジジッ……と音を鳴らす薄暗い廊下を、天草つゆりは歩いてきた。

遠くから、お世辞にも上手いとは言えないクラリネットの音が聞こえる。そういえば吹奏楽サークルの定期演奏会が近かったな、とそんなことを考えながら、彼はサークル棟の二階にある一番突き当たりの部屋を指していた。

途中、どのサークルの持ち物か分からないマネキン人形や、チェスサークルと書かれた囲碁盤など様々な物の間をぬって歩くことになったが、彼は特に気にする様子もなく、慣れたように足を進めていく。

今は、火曜日の、ちょうど三時限目が行われている時間帯だった。授業が集中しているせいか、このサークル棟に人の気配はなく、不気味なほど辺りはしん……と静まりかえっている。

彼は、『帝国大学 演劇サークル』と書かれたドアに手を伸ばす。立て付けの悪いそれを数回ガタガタさせると、ドアはやつと開いた。

「……んあ？ つゆり？」

誰もいないと思っていた部屋に、先客がいた。間の抜けたような男の声と共に吐き出されたタバコの煙。男が好んで吸うタバコ特有のにおい。つゆりはおもわず眉根を寄せた。

六畳ほどの室内の一角に、大道具兼くつろぎ用のソファが置かれているのだが、タバコの煙の主は、そこに座っていた。

つゆりはしかめっ面のまま、その男に近づいていく。

「水無瀬……今は刑法の授業中じゃなかったのか？」

「俺の授業 把握してくれてたんだな」

水無瀬と呼ばれた男は、嬉しそうに口元に笑みを浮かべる。そんな水無瀬を見たつゆりは呆れたようにため息をついた。

「一年の頃から再履修を繰り返してる科目なら、こつちだつて嫌でも覚える」

吐きかけられた煙のにおいを払うように空中で手を二、三度振る。その仕草を見て、水無瀬は仕方ないといった様子で窓を開けた。空中に漂っていた煙は、五月の風に消えてゆく。

「こつちだつて、再履修したくてしてるわけじゃないんだぜ？ 何でか火曜の三時限目って気分がノらないんだよ」

その言い訳を聞くのも、今回が三度目だった。

「……必修科目なんだろう。また単位落として留年したらどうするんだ」
 「あ……それは困るな。お前と一緒に卒業できなかったら嫌だし」

突然発せられた言葉に、つゆりは自分の顔が一気に上気したのが分かる。反射的に顔を上げると、得意げに笑う水無瀬と目が合った。からかわれたのだとわかり、つゆりは一瞬でも胸を踊らせた自分を恥じた。

「お前みたいなやつが後輩になるなんてごめんだ」

精一杯強がった声は、やや裏返ってしまふ。会話を断ち切るように、つゆりはそのまま手近なパイプ椅子に腰を下ろした。

カバンから取り出されたのは、タブレットPCと紙の束。起動する前の暗い画面に写り込んだ自分の顔から目をそらすように、つゆりは手元の紙に目を移した。デスクトップに保存してあったテキストファイルを立ちあげる。画面いっぱい、規則正しく並んだ文字の羅列が現れた。そのまま一枚一枚眺めては、キーボードに何かを打ち込んでいく。

突然喋らなくなったつゆりに、水無瀬は少しからかいすぎたかと反省する。ジーンズの尻ポケットから携蓋灰皿を取り出すと、謝罪の気持ちを込めて吸殻を潰し入れた。

「何してるんだ？」

タバコを片付け終わると、ひよいといつゆりの後ろから液晶画面を覗き込む。

「……近い」

思いの外至近距離から聞こえた不機嫌そうな声に、水無瀬は顔をあげる。声と同じ不機嫌さマックスのつゆりと目が合ったと思った瞬間、バシツと顔面に紙を押し付けられた。

「いつて……！ 何すんだよ！」

ヒリヒリする鼻先をこすりながら、押し付けられた紙に目をやると……なるほど合点がいった。

「この前の公演アンケートか。お前が集計してんの？」

「舞監だからな」

舞監とは、舞台監督のことだ。ひとつの公演が始まってから終わるまで、

稽古のスケジュールを組んだり、練習場の手配をしたりと、舞台全体を管理、補佐する役割がある。サークル長とは違い、舞台の責任者となるわけだ。今回の公演の舞監はつゆりだった。

「……舞監兼、演出な」

水無瀬のその言い方に、つゆりは一瞬引つ掛かりを覚えたが、気付かなかったフリをする。

「集計が全然進んでないんだ。暇を持って余して空気中の酸素をタバコの煙に変えるくらいなら手伝ってくれ」

「はいはい、仰せのままに」

よほど、出会い頭のタバコが気に入らなかつたらしい。これ以上つゆりの機嫌を損ねないように、水無瀬は大人しく隣のパイプ椅子に腰を下ろした。

「……三十代男性……満足度、三……感想、ラストシーンがとても感動しました、これからも頑張ってください……か。のわりに満足度二で微妙だな。次、二十代女性、満足度四。感想、ラストシーンの演出がとても素敵でした！ また見たいです、だつてよ。よかつたじゃんつゆり」

「……………」

「んじや、次な。えーつと、三十代女性、満足度、二……カンパネルラ役が少し棒読みな気がしました……つて、俺じゃねえか！ なあ、このコメントは書かなくていいと思わねえか」

アンケートの束をぐしゃりと握りしめて、水無瀬はぎんぎんやんと叫ぶ。その姿に、先ほどまで黙って聞いていたつゆりが口を開けた。

「うるさい。いちいちお前のコメントを挟まなくて結構」

ぴしやり、と放たれた言葉に、水無瀬はようやく黙るのだった。

そこから真面目に取り組むこと約三十分。紙の束は徐々に減っていき、ついには最後の一枚となった。

「次回公演も楽しみになっています……と。以上！」

水無瀬が言い終わるとほぼ同時に、つゆりがエンターキーを叩く。

「今で最後だな。おかげで思ったより早く終わつたよ、助かった」

打ち終えたテキストファイルがすっかり保存されたのを確認してから、つゆりはパソコンの電源を落とした。

水無瀬とはいえ、アンケートの束を放り投げ、ぐっと伸びをしている。

その手が自然と尻ポケットに向かうと、あ、とバツの悪そうな顔になった。ひと仕事終えた後に一服、と思つたのだろうが、目の前につゆりがいることを思い出したのだ。サークル棟の外にある喫煙所まで行くか、ここで我慢するか――。

よほど深刻そうな顔で悩んでいたのだろう、そんな様子の水無瀬を見て、つゆりはクスリと笑つた。

「目販機に行つてくるよ」

言うが早いか、つゆりはカバンから財布だけ抜き取ると部屋を出ていった。部屋にひとり取り残された水無瀬は、ありがたくつゆりの厚意に甘えることにした。

尻ポケットに入れていたせいでクシヤクシヤになったタバコの箱から一本取り出すと、ライターで火をつける。途端に、葉が焼ける時の甘つたるいような焦げ臭いような独特のにおいが辺りに充滿した。慌てて窓際に移動すると、窓の外に向かって煙を吐き出す。

「……………」

指先に挟んだタバコが、少しずつ少しずつ灰に変わる。ふと、足元に落ちていた物に気が付いた。拾い上げてみると、今回の公演の台本だった。誰かの忘れ物だろうか。なんの気なしにパラパラとめくる。開いてみて驚いた。すべてのセリフにコメントを残しているんじゃないかと思うくらいにびつしりと、見覚えのある几帳面そうな細い字が並んでいた。このサークルに、自分の役のセリフ以外にも事細かにコメントを書き記しているようなメンバーはいない。間違いなく、演出家の台本だった。

――練習メニューに、エチュードとポートレイトを追加、坂道ランニングはプラス一キロ。

エチュードは即興劇のことで、ポートレイトは自分自身をテーマにひとり芝居をすることだ。舞監らしく、練習メニューを考えていてくれたら良かった。

「つゆりのやつ、やつぱ真面目だなあ……ん？」

次に目に留つたのは、俺のセリフに対して書き込まれたコメント――早口になりがち、と赤ペンで書かれていた――ではなく、そのページの隅のほうに小さく小さく残された文字だ。

それは、断片的な言葉の羅列だった。悲恋、コメディ、トリップもの……そしてそれぞれに、ストーリーのネタとなるような言葉が書き連ねられていた。

つゆりは、新しい台本を書こうとしている――水無瀬は直感的にそう思った。本人に確かめたわけじゃないから、本当のところは分からない。ただ、一度その可能性に至ってしまったせいで、彼の思考は止まらなかつた。

つゆりが、新しい台本を書こうとしている。反芻するように何度も何度もその言葉を噛み締める。そして蘇るのは、四年前の苦い痛み of 記憶だった。

あとがき

アホ伝説

初めまして。高校時代、男子の先輩から「アホ伝説、松山ケンイチに似てる！」と言われていたら、横にいた女子の先輩から、「違っ！松山ケンイチこんなじゃない！」と叫ばれたことがあるアホ伝説と申します。この度は本書を手を取って頂き、ありがとうございます。私が書いた『悪と華』は、学生時代感じていた鬱屈感を振り払う想いで書いた作品です。少しでも楽しんでいただけたのなら幸いです。本当にありがとうございます。

植崎優士

物語の責任を担うのは、登場人物だけかなりえないのか——
 ミステリしか書いたことがなかったのですが、今回はそこから離れてみる努力をしました。リドルストーリーを掘り下げたメタ小説のアイデアと、恋愛的シチュエーションが浮かび上がり、何とか形にした次第です。未知の領域にチャレンジすることで、得るものも多かったのです。いつかミステリで表現できるようになればいいなと思います。

空っぽの夜

初めまして、空っぽの夜と申します。ティンカーズ・クラブ、いかがだったでしょうか？書いていたほうとしては、ちゃんと書き上げることができたか不安だったのですが、なんとか形にできました。

今回声をかけてくれた後輩のみんな、思い出話に付き合ってくれた中学時代の演劇部の友人、そして何より、ここまで読んでくださった読者の貴方に感謝です。ありがとうございました。

編集後記

編集の植崎です。

昨年十一月に、専修大学探偵小説研究会の名義で参加した文学フリマ東京でしたが、今年からはOBによる新規サークルとして参加致します。各執筆者次第ですが、今後も継続できるよう編集として微力ながら善処致します。

当サークルの方針としまして「ジャンルを限定しない多様な文芸作品を発表すること」を掲げております。青春、ミステリ、純文学、ホラー、恋愛など、あるいはそれらを越境するような作品と、各著者の個性を表現できることを編集として目標としています。

今回の会誌では、寄稿者が二名とやや残念な結果となりましたが、それでも各自の自信作を持ち寄ることができたかと思えます。これをきつかけに、当サークルへ興味を持って頂けたなら幸いです。

今回は偶然にも、アイデアが被る作品がありました。読後感はかなり違ったものかと思えます。それぞれの作品ごとに異なる世界観を比べて頂くのも一興かと思えます。

また、今後、感想等を頂けると、各著者の励みや反省に繋がりますので、ぜひお気軽に twitter など、で呟かれるなどして頂ければ嬉しいと思います。☺️やメールもお待ちしております。(各種アクセスは奥付に記載)

不定形エンタメ エッジ Vol.1

発行日	2017年5月7日
発行	ティンカーズ・クラブ
印刷・製本	ちよ古っ都製本工房

編集	植崎優士
表紙デザイン	果野
イラスト	果野
写真	植崎優士

著者	アホ伝説 植崎優士 空っぽの夜
----	--------------------

Twitter : @tinkers_club

HP: <http://tinkersclub25.web.fc2.com>
